

生き生きした福嶋の明治人

皇国地誌から見た明治八年の福嶋像

明治維新が完成した頃の明治八年、石川県庁では「皇国地誌」と言う名の下に、各町村の有様を調べて書類にしたのが残されていた。

根上町の分も、大分欠落したものもあるが、福嶋の分は幸いにして完全に残されているので、この地誌のなかを分析して明治初めの福嶋人の「生き生きとした、息吹を感じて見たい」と思う。

先に掲げた「皇国地誌」の一覧表を参考にして頂きたい。

職業

男 農業 二百二十戸 大工 二戸 染物 二戸（肥料を兼ねる、一戸） 養蚕 三十戸 酒造 一戸 味噌・醤油 二戸 麹製造 二戸 飼鳥 一戸（鍛冶屋を兼ねる） 飲食 店 四戸 洗い湯 一戸 質屋 二戸 米小売 二戸
（内古道具を兼ねる） 受酒業 三戸 醤油小売 一戸
穀類業 二戸（木綿・生糸業を兼ねるもの一戸） 菓子商 一戸
（漁業を兼ねる） 油商 一戸 古材木商 二戸 古道具 二戸 肥物商（染物を兼ねる） 一戸 女 農業 百人 糸曳き 十人 日稼ぎ 八十人

生産物の分析（販売先と労働）

米は藩政時代毎年五百二十石の徴税であったが、この時分になると、七百三十石を隣村の湊村に、販売している事が分る。

湊村は、当時既に消費都市であったし、また米を輸出して稼いでいたと考えられる。

蕃薯は薩摩芋のことで、砂丘地を十分に利用して生産したものである。

菜種は四十二石も生産して、火釜に販売している。

桑の葉は、養蚕業になくはならぬ飼料で五万貫の生産とはたいしたものである、私の子供の頃でも、吉原釜屋道は両側とも桑の葉が繁る時には、桑の葉のとんねるの道を釜屋まで行った記憶が鮮明である。

繭は、越中の石動に販売したと記録されている、どうした縁があったのだろうか。

実綿は松任へ販売しているし、綿で糸を紡ぎ織った木綿布は、隣郡の石川へ販売している。量は六百五十匹の多さである。

前項の女性たちの農業や糸曳きの労働が、影の力であつたらう。